

5-5 新越冬地等の整備(案)

- ◆ 出水での健全な越冬地の整備及び出水から移動したツルが越冬できる環境を国内で確保するために、対象となる越冬地の自然環境及び社会環境の整備が必要である。
- ◆ 越冬地は、まずは現在ツル類の飛来がある地域を対象とする（参考資料 5-5 の 1）。
- ◆ 自治体、地域住民、市民団体等にツル類保全・共存に必要な環境整備への理解、協力を求める。
- ◆ 長年ツルと共存してきた出水をモデルとし、その知恵を参考にする。

1 手法の検討

1) 社会環境整備（参考資料 5-5 の 2、3、4）

① 地域の合意形成

- ◆ ツル類は、餌場やねぐらに田んぼを利用するなど、農業と密接な関わりがある。また、地域住民との日常的かつ多様なかかわりも考えられることから、様々な関係者（周辺農家、住民、行政等）の理解・協力（社会的受け入れ態勢の整備）が必要である。
- ◆ 新越冬地では、農業被害や疾病への懸念も想定されることから、関係者の理解を進める必要があり、科学的情報や対処手法等の情報共有が重要である。
- ◆ 出水での取組に際しては、保護の努力を行ってきた地域住民の理解を得ていく必要がある。

② 地域振興や地域の生物多様性保全活動の推進に活用

- ◆ ツル類は昔から縁起の良い鳥として人々に親しまれてきたことから、地域のシンボル又は指標として、新越冬地形成等の取組を地域の振興等へつなげることにより、長期的な共存策を探る必要がある。
- ◆ また、ツル類は、大型で人々を引きつけること、越冬期落ち穂等の植物質を中心として、昆虫などの動物性食物も採食する雑食性であることから、ツル類を地域の生物多様性の象徴種（フラグシップ種）として位置づける。
- ◆ ツル類の飛来地をツル類が越冬地として選んだ場所としてとらえ、地域の住民による生物多様性保全活動の推進に活用する。

③ 必要な調査等

- ◆ ステイクホルダーの洗い出しと聞き取り調査による意見等の整理

- ◆ 地元での勉強会、意見交換会等の開催
- ◆ 受入マニュアルを整備、パンフレット、マニュアル等の活用。

2) 自然環境整備（参考資料 5-5 の 2、5、6）

- ◆ ツルの健全な越冬について積極的に考えてもらう。
- ◆ 既存の利用環境の保全(安全性の確保、環境の維持管理)
- ◆ 生息環境の拡大(水田の冬期湛水によるねぐらの創出、採食地の確保、餌資源量向上の取組等)
- ◆ 受入マニュアルを整備

①必要な調査等

- ◆ ツルの捕獲、標識（衛生追跡含む）調査→渡りルートの解明や、行動調査には個体識別や送信機の装着が必要。
- ◆ 非給餌飛来地域の環境調査・解析
- ◆ ねぐら条件の調査（利用河川の広さや深さなど、タンチョウや海外のナベヅル、マナヅルの事例の収集含む）
- ◆ 餌資源量調査（落穂や2番穂の調査等）